

**軍神の許嫁2**  
姫巫女の試練と軍神の溺愛

沖田弥子 Yako Okita



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

## 第一章 軍神と姫巫女の新たなる戦い

一閃が走り、大気を震わせる。

斬戟を浴びたあやかしが瘴氣を迸らせた。

退魔一課の面々は刀を振るい、獰猛な大型のあやかしを次々に薙ぎ倒していく。

局長の東極一希を始めとした退魔師たちから、白い霧のごとき靈気が立ち上っている。

「姫、靈気を送れ！」

一希の指示を受け、姫は桧扇を翻す。

自らの靈力を高めるために舞い踊り、戦っている退魔師に靈気を補填するのが巫女の

役目だ。

その巫女の最高峰の地位である姫巫女——

姫巫女としての矜持と責任を胸に秘め、姫は懸命に舞う。

トン、トン、と肩にのつた猫又のぼよ丸がリズムを取つてゐる。  
それに合わせて姫の体から凄まじい靈気が湧き上がつた。

ふわりと千早の飾り紐が躍る。

手にした桧扇に描かれた青龍と鳳凰が、天へ向かつて飛翔せんばかりに生き生きと輝いた。

「一希様……受け取つてください！」

先代の姫巫女が使用した桧扇を、姫は振りかざす。

大きく弧を描き、身のうちから迸らせた靈気を一希へ向けて送つた。

姫の靈力を受け取つた一希の体が、白い靄に包まれる。

だが――

すでに彼の足元には倒したあやかしが転がつていた。

それは黒い瘴氣を残し、消えていく。

振り向いた一希から剣呑な声が出た。

「遅い」

鬼の局長の叱責に、姫の頬が強張る。

見ると、多数のあやかしのほんどうを殲滅してゐた。

姫が舞によつて靈気を溜めている間に、戦況は変化していたのだ。  
「す、すみませんでした。たくさん送りたいと思って、靈気を溜めるのに時間がかかりすぎたみたいですね」

「しかも多い。こんなに送つてどうする。戦闘が終盤なのがわからないのか」

「えつと……たくさん送つたほうがいいかなと思いました。戦闘が終わりかけでも、な

にがあるかわかりませんし……」

「だつたらなおさら量を減らせ。おまえが枯渴するだろうが。姫巫女に危機が及べば戦

線が崩壊するとなぜわからない」

濡れ羽のごとき黒髪に切れ上がつた眦、すっと通つた鼻梁、薄いけれど形のよい唇。

端麗な顔立ちと頑健な体躯を併せ持つ一希は、軍神と謳われる退魔師たちの頂点だ。彼の許嫁である姫だが、戦いにおいて軍神は容赦しない。

戦闘のたびにダメ出しの嵐が吹き荒れる。  
姫巫女といえども、姫はまだまだ雛同然の腕前だ。

つい先日までは巫女ですらなかつたのに、一希に見出されて突如、姫巫女に就任したのである。

姫の母は稀代の巫女と呼ばれたそうだが、姫巫女ではなかつた。

先代の姫巫女だつたのは一希の母親だ。

遺伝的な要素もなく、凡庸な容姿で特別な能力なんて持つていらない。

それなのに巫女の頂点である姫巫女なのだから、こんな重職が果たして自分に務まるのかという疑問はいまだ胸のうちにある。

自信と実力が伴つていないせいか、戦闘に参加してもうまくいかないことがばかり。

しかし一希は姫に一切容赦しない。

必然的に姫は日々の戦いに挑むたびに、順調にダメ出しと始末書も積み重ねていくのだった。

今件は確かに一希の言うとおりなのだが、姫にも言い分はある。

「でも、靈氣を減らすと一希様は少ないと怒りますし、そうなつたら私のほうが余るんです。余るくらいなら一気に送ったほうがいいかなと……」

「それは戦況による。指示に従つて適切な量を送れ」

「でも、一希様は大中小とか量については指示しません。といつても調節するのは難しいので、どのくらいと言われても困りますけど……」

そのとき、むにつと唇を摘まれる。

一希の指先で上唇と下唇を挟まれてしまう。

「んむむ……」

「おまえは進展がない。言い訳が多すぎる。もう一度言う。指示に従え。戦況を見極めろ。返事をしろ」

返事ができませんが……

傲岸な上官に従うのも楽ではない。

姫も必死なので、一希にわかつてもらおうとするあまり、言い訳がましくなつてしまつている。

「でも」「だって」は封印したはずなのだが、つい説明の冒頭につけてしまうのが癖になつていて、

しかし言い方を変えろと一希は要求しているわけではない。

彼は戦闘においての立ち回りを正確に見極め、適切な量の靈氣を送れと指示している。

鬼神の末裔として、莫大な靈力を秘めているはずの姫ではあるが、そう簡単にできたら苦労しない。

今は鬼の局長に返事をするしかない。  
ただし唇は摘まれている。

「んんん……」  
姫の肩にのつているぼよ丸が、気の毒そくな目を向けている。

「ぼよ……ワカッタ」

代わりに返事をしてくれた。

普段は「ぼよぼよ」と鳴いているぼよ丸だけれど、少しだけ言葉が喋れるのだ。

姫は必死に首を縦に振る。  
けれど双眸を細めた一希は姫の唇を解放しない。

そのとき、辺りに轟音が響き渡る。

はつとして視線を巡らせると、墓石が倒壊していた。

まだ残党がいたらしい。  
逃亡を図ろうとするあやかしを追つていた嵐宝の一閃が、墓石を薙ぎ倒したのだ。

「おい、そっちに行つたぞ！」

「……承知」

指示を受けたルイの刃が、ぎらりと光る。

豪腕から放たれた斬戟が弧を描く。

咄嗟にあやかしは墓石の陰に身を隠す。

斬られた墓石が、ズズン……と音を立ててあやかしの上に落とされた。  
断末魔の悲鳴を上げたあやかしが瘴氣となつて消えていく。  
ふたりを補佐していた京が声を響かせた。  
「ちょっと、おふたりとも！ 墓石を壊さないでください。また経理部から文句が飛んできますよ！」

「おい、京、後ろだ！」

嵐宝のかけ声に、京はすぐさま振り向く。

そのときには彼は完璧な体勢で刀を構えていた。

墓石の陰に潜んでいたあやかしが京に襲いかかる。

鋭い爪で引き裂かれる寸前、刃で防ぐ。

「僕に奇襲は効きませんよ！」

京が押し返したあやかしが石灯籠に激突する。

轟音を鳴らして石灯籠が倒壊した。

そこに追撃した京の一閃が、あやかしを祓う。

そのときにはすでに一希と姫も駆けつけていた。

ただし姫は、唇から手を離した一希に首根を掴まれている状態である。

まるで猫の子のような扱いだ。

なぜ腕を引かないかというと、一希が姫の腕を拘束すれば舞えないからにほかならない。この状態で舞えと命じられても少々厳しいが……。

あやかしが出現した場所が寺なので、墓石が林立している。

身を潜められるところが多く、敵が散開したため殲滅には時間を要したが、どうやら片付いたようだ。

周囲からはあやかしが放つ瘴氣<sup>しょうき</sup>が消え失せている。

一息ついた京は刀にまとわりついている黒い靄<sup>もや</sup>を払った。

「これで全部ですかね」

「さまあねえな。オレが声をかけなかつたら危なかつただろうが」

嵐宝の煽りに、唇を尖らせた京は半眼になる。

中性的な顔立ちで、すらりとした体躯の彼がそんな仕草をすると可愛らしさが滲んだ。

しかし京の内面は雄々しさの溢れる腹黒である。

スッと彼は刀をかざした。

「嵐宝さんは暴れ足りないんじやないですか？ 怪我してもかまわないなら、僕がお相手してあげてもいいですよ。もちろん手加減しますが」

ピキッと、こめかみを引きつらせた嵐宝も刀を構え直した。

大柄な体躯で浅黒い肌に茶髪の彼は、腕つ節が強い。

「おめえな……上等だぜ。痛い目を見ねえと、『声がけしてくれてありがとうございました』って言えねえみたいだな」

「僕の名誉にかけて、死んでも言いません」

「じゃあ、いつぺん死ねよ。生まれ変わつたら腹黒が治るんじやねえか？」

唐突に踏み込んだ京が嵐宝に猛然と迫る。

ギインと剣戟<sup>けいけい</sup>の音が鳴り、火花が散つた。

一撃を受け止めた嵐宝が刀越しに歯を食いしばつた。

余裕の笑みを浮かべた京が押す。

「油断したらいけませんよね」

「油断なんかしてねえんだよ……この腹黒がアツ」

嵐宝が押し返すと、離れた京は問合ひを取つた。

だが、ふたりの戦いは止まらない。

すぐに斬戦<sup>ざげん</sup>を打ち込み、互いに一步も引かなかつた。

すでに刀を鞘に収めたルイは木陰に避難している。

彼は木漏れ日に銀髪を煌めかせながら、冷めた眼差しで事態を見守っていた。

「……また始末書か」

ふたりの振り回した刀が木々を倒し、墓石を破壊する。

あやかしとの戦いで生じた被害はさらに拡大した。

狼狽した姫は慌てて桧扇をかざす。

「あわわ……靈気を送らないと……」

もう敵はないのに、退魔師が真剣に戦っているのを見たら勝手に体が動いてしまう。完全に職業病である。

その場で舞おうとしている姫の首根が引き寄せられる。

一希に猫のように吊り下げられ、「あうう」と声が漏れた。

「おまえら、いい加減にしろ！」

軍神の怒号が響き渡る。

まるで地獄から轟いたかのような一喝に、空気が振動した。

それとともに剣戟の音がやむ。

しんと静寂が染みると、あとには無残に破壊され尽くした墓場が広がっていた。



姫はもともと、この名ではなかった。

生まれたときに両親がつけてくれた本当の名前は忘れてしまった。

母は稀代の巫女として名を馳せたらしいが、詳しくは知らぬまま亡くなってしまった。そして父の後妻として和倉家にやつてきた継母のカノエと、連れ子である姉の美緒子から「無む」と名付けられ、下女のように扱われてきた。

父も病で亡くなつたあと、狭い村では誰も助けてくれる人もなく、黒い仮面をつけさせられ、虐げられていた。

十九歳になつた無は、このまま村で朽ち果てるのだろうと人生を諦めていた。そんな不遇の身から救つてくれたのが、退魔師の東極一希だ。

月夜の晩に湖畔で出会つた彼は、無と同じ呪紋の持ち主だった。

生まれつき舌に刻まれた藍の紋様には宿命があったのだと一希から知らされる。村で行われた奉納の儀では、巫女ですらなかつた無を一希が指名してくれたおかげで、

舞を披露できた。

もに暮らしている。

そこで姫は呪紋の真相を知らされた。

姫と一希は鬼神の末裔であり、ふたりの持つ舌の呪紋を合わせると、莫大な靈力を發揮できるのだという。

呪紋は舌に刻まれているため、合わせるには深いキスをする必要がある。

容赦なく迫つてくる一希を、姫は押し留めた。

許嫁とはいえ、そう易々とキスできない。

しかし問題は呪紋だけではなかった。

日本皇國を守護する四神一族のひとつである東極家の花嫁になることは、すなわち姫巫女の地位を得ることである。

退魔師とともにに戦う巫女の最高峰である姫巫女になり、一希とともにあやかし退治に向かつた姫は、己の置かれた状況が過酷なものであると知つた。

まつたく靈力が出せず、舞すら覚束ない。

巫女としての基礎を身に付けていなかつた姫は、師範の綾小路蓮花から特訓を受ける。さらに猫又のぼよ丸を助けたことにより、靈力を取り戻せた。

局長の一希を筆頭として、五龍神田京、嵐宝景虎、久遠ルイに加わり、姫とぼよ丸は

退魔一課の一員となり、活躍することになつた。

休日には一希と桜を観賞するという初めてのデートをして、かんざしの贈り物をもらい、彼への恋心を自覚した。

そんなとき、村にいるはずのカノエと美緒子が屋敷を訪れる。

彼女たちは姉の美緒子こそが一希の花嫁になる資格があると主張したが、一希は明確に断り、「俺の花嫁は姫だけだ」と言つてくれた。

安堵した姫だったが、繼母と姉の策略により誘拐され、監禁されて暴行を受ける。再び黒い仮面をつけられ、絶望しかけたところをぼよ丸に助けられて脱出した。だがその間際、あやかしに喰われてしまう。

あやかしの胃の腑で溶かされる危機に陥つたが、救出のため、自らも呑まれた一希に抱きしめられ、姫は陰惨な過去を乗り越えたと知る。

くちづけを交わして呪紋を合わせたふたりは驚異的な靈気を迸らせ、あやかしを倒した。

一希との絆を深めた姫は許嫁として、姫巫女として、彼とともに生きていくと決意を固めたのだった。



退魔師局の最奥に、退魔一課の看板が掲げられている。

そこは少數精銳のエリートが集められた退魔師の中核である。

だが本日、退魔一課の面々はげんなりした顔をして、それぞれのデスクについていた。ドン、と局長のデスクに大量の書類が積まれる。

経理部の財前尚嗣は眼鏡のつるを押し上げた。

「この大量の請求書と明細をご覧ください。すべて退魔一課のみなさんの退魔という名の破壊活動により生じた賠償です。先日の寺での戦闘では多大な損害が発生しました。一課のみなさんが倒すのはあやかしですか、それとも墓石なのでしょうか。我々経理部は夜を徹して膨大な経費を処理しております。どうすればこんなに墓石を破壊できるのか、わたくしは大変疑問です」

蜂蜜色の髪をした財前は、書類を前にして滔々と述べた。

先日の墓場での戦闘において、墓石や灯籠や樹木など、あやかしを退治するついでに多くのものを壊してしまった。

もつとも、損害には戦いのあと京と嵐宝の小競り合いも含まれている。

こういったことは多々あり、出動のたびに始末書が提出され、経理部に回される請求書も膨大になっている。

ついに羹を煮やした財前が、退魔一課を訪れて苦言を呈しているわけである。端のデスクで姫は身を小さくしていた。

隣のルイはまっすぐに背を伸ばしたまま瞼を閉じ、寝たふりをしている。

書類のひとつを捲<sup>めく</sup>つて確認した一希は苦い顔をした。

「我々は命を懸けて戦っている。その過程で物品が破壊されるのは致し方ない。この程度の経費は相応ではないか」

「この程度?」東極局長はこの金額が相応と仰<sup>おつしや</sup>いますか。お言葉ですが、今ここにある請求書の額面だけで、退魔師局の半年分の予算になります。それを退魔一課がわずか一ヶ月で使い果たしているのですよ。とてもない浪費です」「予算を増やせ」

さらりと言つてのける一希に、財前は頬を引きつらせる。

一希は大変な浪費家である。彼は金に糸目をつけない。

姫のために呉服屋を呼んで着物を買い占めようとしたし、黄金の馬車を贈りたいなどと本気で言い出す。

東極家は公爵でもあり、生まれつき莫大な財産を持つ一希には、節約という感覚が備わっていないと思われる。

「そう簡単に仰りますけどね、増やせばよいというものではないのです。みんなの暴挙を抑えなければ、経費は膨らむばかりになります。特に一課は無法者ばかりと局内では有名なんですから。一課の請求書が回ってくるたびにわたくしは胃を痛めております」

財前の文句は止まらない。

延々と垂れ流される彼の口上を、しらけた顔をして聞いていた嵐宝が遮った。  
「オレらが暴れるから請求が増えみたいに言うなよ。物を壊さないように恐る恐る戦つてたら、こっちが殺されるんだよ。金で命は買えねえんだぞ」

彼の隣の席にいる京も賛同する。

「一課がもつとも危険な任務を請け負っているわけですから、費用が増えるのは当然ですよね。うちの請求を減らしたいなら、任務を割り振っている総務に掛け合つたらいかがでしょうか」

くるりと振り向いた財前は、眼鏡の奥の双眸を煌めかせる。  
彼は冷徹な声を発した。

「五龍神田少尉及び、嵐宝軍曹においては、私闘による物品破壊の嫌疑があります。おふたりが度々私闘を繰り広げているという目撃証言が市民から寄せられていますが……どういった事情か、わたくしに説明していただけますか」

居住まいを正したふたりは同時に咳払いをこぼす。

京と嵐宝はよく喧嘩しているが、存外に仲がいいのかもしれない。

「誤解です。以後、気をつけます」

「ちょっと熱くなつただけだよ。そういうこともあるだろ。大体な、壊したくてやつてるわけじゃねえんだ。ルイだって斬った墓石を敵に当てるつて戦法を取つてたよな」「……こつちに飛んできたか」

ぼそりとつぶやいたルイは瞼を開けた。

嵐宝が苦し紛れに投げた玉が、ルイに飛んだようである。

財前の險しい眼差しが、ルイに向けられる。

「故意に墓石を斬つたのですか、久遠軍曹？」

「……うん。そういう戦法だ。斬るだけでなく地の利を使うこともある」

「……ぼよ」

なぜか、しゅんとしたぼよ丸が頷く。  
素直に述べたルイをかばつてゐるらしい。

思いきり嘆息を漏らした財前は天を仰いだ。

一希は書類を確認しながら述べる。

「彼らの言うとおりだ。破壊するために戦つてゐるのではない。それに、戦場における破壊は我々の責任だけではなく、すでにあやかしによつて荒らされていた場合もある」確かに一希が言うように、退魔師だけが破壊しているわけではない。

暴れたあやかしが堀や小屋を壊したり畠を荒らしたりして、人的被害に及びそうな状況だからこそ退魔師が呼ばれるのだ。

退魔師たちは静かに暮らしてゐるあやかしをあえて探し出し、脅かそうなんてしない。人々の安全を守るために、被害を出さないように獰猛なあやかしを祓つてゐるのだ。

ゆえに一定の破壊が生じるのは道理なのだった。

京が、ぽんと手を打つ。

「そうんですよ！ 僕たちのせいにされでますけど、あやかしが壊してゐる分も全部含まっているんです。これつて不公平ですよね。あやかしにも賠償を負担させるべき

じやありませんか？」

「えつ……あやかしに負担させるつて……でも、言葉が通じませんよね？」

思いがけない案に、姫は首を傾げる。

あやかしは悪霊や妖狐の類いなので、人間のように言葉や理屈が通用しない。

それに金銭のやり取りをしないだろうから、賠償という概念自体が存在しないだろう。

姫は肩にのつてゐるぼよ丸を、そつと撫てる。

「ぼよ丸は言葉が通じますけど、賠償してほしいと言われても困りますよね」

「ぼよ」

二叉の尻尾をふるふると心地よさげに振つてゐる。

ぼよ丸は飼い猫のように可愛らしく賢いが、賠償という言葉についてはよくわからぬだろう。

眉をひそめた財前は眼鏡のブリッジを押し上げる。

「斬新な意見ですね。法的には、あやかしにも賠償の負担が生じます。しかし彼らは文化的な生活を営んでいません。人間と同等の知能を持ち、家や村などの集落や団体で生活していくければ、賠償を請求される身分とは言えないのではないか？」

「あやかしはともかく、呪術師になら請求できるんじゃないでしょうか？」

京の意見に、ぴたりと一希の手が止まる。

姫は一希の顔をそつとうかがい見た。

呪術師についての詳細を姫は知らないが、かかわりはある。

継母と姉に監禁されたとき、姫を喰わせるあやかしを呼び出すため、カノエが取り出したのは呪符のようなものだった。それは継母が何者から受け取ったものらしい。

呪術師は呪符を使用してあやかし操れるようなので、カノエの背後には呪術師が存在するのではないかと、事件後に一希から聞いた。

今も拘置所に拘留されている継母と姉は、詳しいことはわからないと尋問で言い張っているそうだ。

姫としても、これまでふたりが呪術師やあやかしにかかわったことはないと思える。それならば、なぜ呪術師と思われる人物はカノエに接触してきたのだろうか……

京は言葉を継いだ。

「そもそも、あやかしを操っているのは呪術師という説がありますよね。彼らの正体は謎に包まれていますけど、僕たち退魔師と同じようにふつうの人間で、組織的なものが存在するんじゃないでしょうか」

「ほう……。つまり呪術師の正体を突き止めれば、彼らにこれまでの賠償請求ができる、

と五龍神田少尉はそう仰るわけですね」

「そのとおりです。それなら財前さんも予算の心配をしなくてすみますよね」

につこりと京は可愛らしく微笑む。

呼応するように財前も笑みを返した。

呪術師の正体を突き止めるなんて、可能なのだろうか。  
なぜか姫の胸が不穏に包まれる。

あやかしを操る呪術師は退魔師の敵だ。

しかも彼らは堂々と現れるのではなく、継母を利用して姫を亡き者にしようとした。手を汚さずに姫巫女を葬ろうとするような狡猾な呪術師の正体を暴き、賠償を交渉しようなんて、とてつもなく遠い話に感じる。

とはいって、継母に呪符を渡した男が本当に呪術師と判明しているわけではないし、呪術師が姫を殺すつもりだったと明確になつてはいないのだ。

財前は笑顔のまま京へ問いかけた。

「それは、いつですか？」

「えっ？」

「こちらの請求書は今月末に決済されます。五龍神田少尉は、いつ呪術師の請求先を明

示してくださいのですか？」

京の笑みが固まっている。

室内には気まずい空気が漂つた。

一希は険しい表情を浮かべつつ、書類を捲つてている。

「……と書類を捲る乾いた音が静かな部屋にやたらと響いた。

彼がきつく眉根を寄せているのは、書類に記載された数字のせいだけではない気がする。

呪術師について、なんらかの思うところがあるのだろうか。

姫は息を呑みながら、一希の顔をうかがっていた。

姫の向かいのデスクに座っている嵐宝が、無言で隣の京を肘で小突く。

「とりあえずなんか言え」という彼の心の声が聞こえた気がした。

京が小首を傾げると、さらりと漆黒の前髪が落ちてその額にかかる。

「いつと言われば……いずれという話ですね。僕たち退魔師は必ず呪術師の全容を解説してみせます。それも人々の安寧のため、そして経費削減のためです。——そ

うですよね、みなさん！」

きつちりとみんなを巻き込むところが彼らしい。

もつとも経費のこと、呪術師について、京だけの問題ではない。

退魔一課は一蓮托生だ。

仲間なのだから生きるときも死ぬときも一緒、そして賠償もみんなの責任ということになる。

姫は巫女のため補佐役として戦闘に参加しているので、あやかしと直接戦うわけではなく、一片も破壊していない。

けれど姫は退魔一課の一員なのだから、当然姫にも責任はある。やたらと明るい京の声かけに、姫とルイはこくりと頷いた。

嵐宝も無言で頷いている。

呪術師の全容を解説することに否はない。

しかし財前は納得いかないようで、胡乱な目を京に向かつ腕組みをした。

「それは希望的観測ですよね。わたくしが聞きたいのは、具体的な日時です。賠償を請求できる先がなければ費用を分担できません。膨大な請求書の処理をいつまでこちらでしなければならないのかと――」

さらに言い募る財前の前に、姫が進み出る。

白練の上衣に朱の袴という巫女服をまとった姫は、頭を下げた。

「財前さん、申し訳ありません！ 経理部のみなさんは大変な思いをしてお仕事されて

いると思います。私も一日でも早く、財前さんを安心させてあげたいです」

頭を上げると、長い黒髪がさらりと舞う。

姫はまっすぐに財前の顔を見上げた。

財前は一刻も早く結果を求めるように言うが、やはり退魔一課の誠意を見たいのではないかと思つたのだ。

なぜか睫毛を瞬かせている財前は、眼鏡のつるをガクガクといじつている。

「ひひひ姫様、とんでもございません。わたくしはひひひ姫様をけなしているわけではありません。それなのにわたくしどもをねぎらつていただけるなんて恐縮です」

彼はひどく早口になり、声が上擦つていて。

姫の呼び方に特徴があるが、いつたいどうしたのだろう。

嵐宝がぼそと「緊張しすぎだろ」と漏らす。

隣の京が肘で小突いた。

姫はいつそう目をキラキラさせて、財前を見つめた。

自分の想いをわかつてもらうために懸命に言葉を紡ぐ。

「財前さんの希望を叶えたいのですが、今月中は難しいと思います。でもいつかきっと、

財前さんの望む具体的な日時をお伝えします。そうしたら経理部のみなさんの負担が減りますよね」

「え、ええ……ひひひ姫様のお望みどおりにしていただけますと幸いです」

「本ですか？ ありがとうございます！」

嬉しそうに声を上げた姫の口が大きく開かれる。

舌に刻まれている藍の呪紋が露わになつた。

目を見開いた財前が身を屈める。

彼の眼鏡が姫の間近に迫つた。

「んむっ」

そのとき、大きくてのひらで姫の口が塞がれる。

冷徹な気配を発した一希が、姫の後ろに背後霊のびとく、ぴたりとついていた。

「財前……おまえは姫の口の中に入るつもりか？」

はつとした財前は姿勢を正す。

呪紋が珍しいので、彼はじっくり見ようとしていたらしい。

鬼神の末裔の証である呪紋は、今のところ姫と一希のふたりきりしか持つていない。この呪紋には鬼神の莫大な靈力が秘められているのだ。

退魔師局では呪紋やその効力について把握しているが、呪紋を解錠させる方法がキスだとは誰も思っていないだろう。

姫だつて、忌まわしいと思っていた呪紋にそんな秘密があるなんて想像もしていかつた。村で虐げられていた頃は、この舌の紋様があるゆえに呪われているとされ、仮面をつけさせられていたのだから。

今は一希が堂々としているのもあり、姫も素顔をさらして口を開けることに対して抵抗が薄ってきた。

それも一希や退魔一課のみんな、そして屋敷の人たちが優しく接してくれているおかげだと感謝している。

しかし一希がことあるごとにキスしようとしてくるので少々困っている。  
くちづけたいというより、彼は呪紋の解錠を試みようとしているのだ。

そのたびに姫は自らの口を手で覆うわけだが、なぜか今は一希に塞がれている。  
因果なものである。

一希様は呪紋の秘密を公にしたくないということですね……

まだ舌の紋様については謎が多い。

先日、初めてふたりは舌を合わせて呪紋を解錠したばかりだ。

あのときに発した強大な靈力は、時間が経つと夢だったのではと思うようになつていった。終わつてしまえば舌の紋様は沈黙しているし、一希も平然としていたからだ。  
一希に指摘され、財前は慌てて姫の前から飛び退いた。

なぜか彼の顔が赤く染まっている。

恥ずかしいのは姫なのだが。

ただし一希の大きな手は、まだ姫の口を塞ぎ続けている。

「ひひひ姫様、大変失礼いたしました！　これが、かの鬼神のしるしかと驚きまして……どうかご無礼をお許しください」

「んんむむ」

お気になさらず……と言いたいが、声にならない。

にっこり笑つた京が疑問を述べた。

「局長にも同じしるしがありますよ。局長が喋つたときは視こうとしないのはどうしてですか？」

「だよな。姫様のは右向きだから珍しかつたのか？」

嵐宝の言うとおり、姫の呪紋は円が右向きに湾曲している。  
対して一希のものは左向きになつていて、すべて自分を軸としての方向である。

何重にも描かれた円は歪んだ形をしていて、その周囲には複雑な文字のようなものが並べられていた。

精緻な模様にもかかわらず、ふたりの呪紋は完全に左右対称になつており、鏡合わせの状態なのだ。

それゆえ、それぞれの舌を重ね合わせると合致する。

ふたつの分かれた呪紋がひとつになることで、秘められた鬼神の靈力が發揮されるという仕組みだ。

けれど、そのためには深いキスが必要というわけで……

姫としては心を通わせないとキスできないと思っているし、鬼神の靈力を解放するという目的でくちづけするはどうなのかという疑問がある。

だから許嫁であつても、一希と積極的には接吻に応じられないでいる。

恥ずかしいので、できればみんなには解説方法がキスなのは知られたくないなかつた。

一課の面々に煽られた財前は眼鏡のつるをいじり、咳払いをこぼす。

「わたくしはデリカシーのない男ではございませんので誤解なきよう。……それでは本

日はこれにて失礼いたします」

分が悪くなつた財前はそう言い置くと、逃げるように退出した。

ひとまず彼は納得してくれたようだ。

しかし請求書の処理は毎月発生するので、早々に呪術師について解決しなければ財前の文句を止められないだろう。

閉じられた扉を見ていた嵐宝が、ひとことつぶやく。

「財前を黙らせるには姫様で対抗すべきだな」

「強力ですよね。ここに攻略法があつたとは僕も今まで知りませんでした」

「……同意」

みんなの感想に、姫はぱちぱちと目を瞬かせる。

姫は正直な気持ちを述べたまでなのだが、想像以上に財前の心を揺るがすことができたらしい。

きっと誠意が伝わったのではないだろうか。

ほつとした姫だったが、一希はいまだに口から手を離してくれない。

「んんうむ？」

一希様、どうしましたか……と、彼の手の中でも「もご」とつぶやく。

仰ぎ見ると、一希は鬼神のごとく怜俐な眼差しでこちらを見下ろしていた。

「姫。ほかの男の前で口を開けるな」

地獄の底から響くような声に、ぞくりと背が震える。

一課の面々は、さっとデスクに向かうとペンを取り、書類に書き込んだ。

公人である彼らは戦うのみならず、こうして書類を処理する業務も行っている。

口を開けるなど命じられても、会話するためにはそうもいかないのだが。

でも「希は、呪紋を無闇にさらすなと言いたいのだろう。

こくこくと頷くと、ようやく彼の手が離れていく。

解放された姫は、大きく息を吸い込んだ。

「ふはっ……承知しました、一希様」

「口を閉じろ」

「はい……。大きく開けるのは控えます。でもまつたく喋らないわけにもいかないんですけど」

「今日はもう喋るな。おまえがほかの男と会話していると腹が煮える」

「それなら手で口を覆えば呪紋は見えませんし、一希様も安心できるんじゃないでしょうか」

業務上の会話があるので、ずっと黙っているわけにもいかない。

それに退魔一課の面々は姫と一希の呪紋がいつも目に入っているから、今さら珍しうか

がつたりしないのではないか。

「そういう問題ではない。——ぼよ丸、おまえが姫の代わりに男どもと会話しろ」

黒鳶色の双眸が獰猛に細められる。

軍神の威圧を感じたらしく、ぼよ丸は「ぼよっ……ショーチ」と即座に返事をした。

ちらと、こちらに目を向けた嵐宝が「オレら完全にお邪魔虫——」と言いかけたところで、京が鳴つてもいい電話を取る。

「はいっ、退魔一課です。——あつ、間違い電話だったようですね」

チン、と黒電話の受話器が置かれる。

なんだか慌てているようだけれど、どうしたのだろう。

小首を傾げた姫は、一希に微笑みかけた。

今日のところは退魔師たちとはぼよ丸を通して話すとして、一希との会話は問題ないはず。

「一希様、請求書の整理がありますよね。私にもお手伝いできますか?」

「ああ……そうだな。手伝ってもらおうか」

財前の残していく書類は局長のデスクに山積みにされている。

姫はそれを分けると、自分のデスクで書類の整頓を手伝った。

一希や、みんなの手助けができることが嬉しかった。

村にいた頃は「無」と蔑まれ、なんの価値もない存在とされていたから。

まだまだ姫巫女として役に立っているとは言いがたいけれど、小さなことから積み重ねていこう。

姫の心に希望の灯火(とうひ)が点る。

バラ……と紙の擦れるかすかな音が、平和な一課に鳴り続けていた。



朝陽の眩しさに、姫は目を眇(すが)める。

広大な東極家の敷地には白い霧が漂っている。

壯麗な屋敷を囲むように、深い森のごとき樹木がそびえて霧をまとわせていた。

早朝の清涼な空気を吸い込むと、眠気が吹き飛ぶようだ。

気分がすっきりするので、箒を持つ手も軽快に動く。

姫は毎朝、東極家の玄関前を掃き清めている。

旦那様の許嫁という身分なので掃除をしなくていい、と初めはメイドたちに止められ

たが、一希が認めてくれたので、今ではすっかり姫の仕事になっていた。

退魔師局では姫巫女という役職だが、東極家においての姫は一希の許嫁である。その責任は重大だと認識している。

なにしろ四神一族のひとつである東極家は公爵でもあり、帝の信頼が厚い。

もしも一希と結婚したら、姫は公爵夫人の身分になる。

この屋敷を初めて訪れた翌日には、姫巫女となる承認を得るため、生まれて初めて御所へ赴いて帝に謁見した。

御簾越しに話した帝から厳かな声で、「忠節を尽くしてくれるか」と訊ねられた。

そのときはあまりにも動搖してまともな答えが返せず、一希に叱責されてしまった。

姫は「忠節」などという高尚な言葉に接したのは初めてで、その意味すらよく知らなかつたのである。

あらためて考えると、一希の妻になり、姫巫女の地位に就くということは、つまり

「日本皇國を背負う……ということでしょうか」

自分の想像なのに、壮大すぎる責務を感じて、くらりと目眩(めまい)がする。つい先日までは村の下女でしかなかったのに、姫巫女とか、公爵夫人とか、国を背負

うなど、無謀ではないか。

もとより姫は野望などという、たいそうな気持ちを持っていなかった。

両親が亡くなつたことを悲しみ、日々の家事を懸命にこなし、継母と姉からのいじめに耐えていただけで精一杯だった。

唯一の癒しは湖畔でひとり、舞を踊ること。

そんなちっぽけだった自分が、そう簡単に変われるのか。

これからいつたいなにができるというのか。

考え出ると懊惱の迷路から抜け出せなくなってしまう。

手が止まりかけていると気づいた姫は、はつとなつて箒を往復させた。

「ということ……一希様の花嫁になると同時に姫巫女にもなるから、たくさんの責任を負うことになるんですよね」

姫巫女は日本皇國にひとりしか存在せず、唯一の存在らしい。

先代の姫巫女である一希の母はすでに亡くなつており、それからは姫が就任するまで姫巫女の位は空白だつたのだ。

一希の母が使用していた桧扇には青龍と鳳凰が描かれているが、縁あつて今は姫が使わせてもらつてている。

東極家の主と婚姻を結ぶ女性が、姫巫女と定められている。

ふと、姫は疑問を覚えた。

四神一族は四家あるわけだが、ほかの三家には姫巫女を選ぶのも、結婚した女性を姫巫女にするものできない。それはなぜだろう。

姫を花嫁に選んだのは一希の一存だ。

帝に姫巫女の承認を得るため謁見したが、話はすでに通つていてほぼ決定しているようなものだつた。

東極家がもつとも格上だからということなのだろうか。

ほかの四神一族で知つているものには、南条家がある。

退魔二課に所属する南条清志郎は一希を敵視していて、ふたりは犬猿の仲のようだつた。

姫は南条とも何度か顔を合わせたが、彼は姫に氣があるような言葉をかけてくるので困惑したものである。

南条家は京都の公家だそうだ。

ということは公家であつても東極家より格下なのか。  
ほかの二家はどうなのだろう。

姫は呪術師についてもなにも知らないが、四神一族のこともまったくわからない。今は屋敷と退魔一課、それに現場の往復で精一杯だ。

さらに巫女舞の稽古にも通っている。

日頃から頭に浮かぶのは靈力、局長のダメ出し、そして経費……などである。

けれど、いずれ一希の妻となるからにはさまざま知つていかなければならぬだろう。

「一希様に聞いてみましょうか……。南条家のほかのふたつについても、名前すら知らないのは困りますよね」

独りごちていたとき、玄関へと続く道の向こうから、馬車が駆けてきた。

こんな早晨に来客だろうか。

本日は休みなので退魔師局へ出勤しなくてもよいため、一希の知り合いが訪ねてきたのかもしれない。

玄関前に停まつた馬車の扉が開くと、商人風の恰幅のよい男性が降りてきた。

「おはようございます。お呼びいただきましてありがとうございます」

「は、はい。おはようございます」

彼は屋敷の者に呼ばれてやつてきらしい。

姫はなにも聞いていないので、まつたく事情がわからない。

野菜などを運んでくる商人は台所のある裏口から出入りすると知つているが、それとは違うのだろうか。

商人らしき男性は、馬車に積んでいた行李を部下と思われる男性たちに運ばせていた。彼らは慎重な手つきで行李を持っている。

かなり頑丈な素材なので、中に入つているものは纖細で大事な品物なのだろう。

少なくとも野菜ではなさそうだ。

不思議に思つていると、また玄関先に別の馬車が到着する。

ほかにも何台もやってきて、玄関前の馬車寄せには瞬く間に馬車の列が連なつた。

姫が呆気にとられていると、馬車からは同じように商人らしき人々が降りてきて、重厚な行李を屋敷へ運んでいく。

いつたい何事だろう。もしかすると、かなり珍しい野菜なのだろうか。

姫は男性のひとりに訊ねた。

「あの……みなさんは商人なんですか？」

「そうでござりますよ。東極様にご指名いただきまして光榮です」

「ご指名……といいますと?」

「わたくしどもの店は三百年の歴史がある老舗でして。世界中の名品を取り扱つております

ます」

「名品……もしかして、あの行李の中身は壺とか、骨董ですか?」「いええ。こちらがわたくしの名刺でございます。ぜひ、ご覗員に」

男性は丁寧な所作で一枚の名刺を差し出す。

それを姫は両手で受け取った。

カラン……と、手から離れた箒が転がる。

名刺の店名をなぞり、姫は瞠目した。

「三橋金銀宝飾店——。えつ、まさか、宝石……?」

彼らは宝石商であり、あの行李の中身は宝石らしい。

どうりで頑丈な行李に入れて、数人で運ばなければならぬわけである。莫大な金額の代物だから傷ついたり盗難に遭つたりしたら大変なことになる。

はつとした姫は息を呑んだ。

この屋敷で宝石商を呼ぶ人物はひとりしかいない。

「一希様……!」

慌てて屋敷に駆け込み、一希の姿を捜し求める。

すると彼は広間にいた。

広間は賓客を呼んでパーティーを行うために使用する大きな部屋である。もつとも姫はそのような経験はないし、一希もパーティーを開こうとはしない。重厚な扉を開けた姫が踏み込むと、藍の紬をまとっている一希が振り向く。  
「ああ、姫。ちょうどよかつた。今、蘭々を呼びにやろうと思つていたところだ。すぐに準備が整うからな」

キラキラと輝きを放つ彼に圧倒され、思わず姫は仰け反る。

一希自身が光を発しているのではなかつた。

彼を取り巻く宝石たちが眩い輝きに満ちているのだ。

「……一希様。これはどういうことでしようか……」

広間には先ほどの商人たちが、いそいそと台座を設置して、そこに宝石を並べている。ちらつと見ると、いずれも高価そうなネックレスや指輪など女物と思われる商品だ。

姫の脳裏に、一希が着物を購入しようとしたときのやり取りがよみがえる。

あのときも姫のためにと、彼は金額を確認もせずにあれこれと選んでいた。もしも物には値段があると知らないのではないかとすら思つてしまふ。

そう、一希は大変な散財家なのだ。最強の軍神と恐れられ、地位も財産もあり、麗しい外見の一希が、最悪の欠点を持つ

ているとは誰が想像するだろうか。

爽やかに微笑んだ一希は、さらりと言う。

「姫に宝石を贈ろうと思つ」

「りりません」

「早いな」

一希は訝しげに双眸を細めた。

ここにふたりの戦いが始まる。

彼の言うままに購入していたら、破産してしまう。

資産は無限ではない。

限りある財産を大切に使い、節約しながら暮らしていくべきだ。

それに姫は着物や宝石などをほしいとは思っていない。

贅沢したいなんていう望みはなかつた。

もしもいただけるものがあるとしたら、それは靈力である。

一希のもとへ駆け寄つた姫は、彼の腕にしがみつく。

隅へ引っ張ついくと、耳元にこそそと吹き込んだ。

「一希様、みなさんに帰つてもらつてください」

「なぜだ」

「宝石を購入するわけにはいきません。あれつて全部、値段がついている商品ですよね？」

「そうだが。姫に贈り物をするために宝石商たちを呼んだのだ。好きなものを選ぶといい」

顔を綻ばせる一希は、心から姫を喜ばせてあげようと思つてゐるのだ。  
しかし、これだけは譲れない。

彼にわかつてもらうため、姫はいつそう耳元に唇を寄せる。

「宝石はとても高額です。私にはそんなに高価な代物は必要ありません。お金がもつたいないですよ」

「そんなことはない。姫は俺の許嫁だ。東極家の花嫁として、ふさわしいものを、婚約の品のひとつとして贈りたい。金のことなど気にするな」

一希の台詞に、姫は頬を引きつらせる。  
婚約の品のひとつ——ということは、これきりではないともいうのか。

しかも、彼が金銭について軽んじているような言い方をするのも気になつた。  
金のことなど気にするな、という台詞はいかにも大金持ちの旦那様らしい鷹揚さを思

わせるが、将来の妻としてはしつかり財布の紐を締めさせてもらいたい。

「この間、財前さんから怒られたばかりじゃないですか。一課でも経費をたくさん使つているんです。なんにも気にせずに散財していたら、困こともありますよね」

「退魔師局の経費は、これとは別だ。それに俺は散財しているわけではない。これは必

要経費というのだ」

これほど破壊力のある言葉があるだろうか。

一希の口から「散財しているわけではない」と吐かれたら、もはやどこを指摘すればよいのかわからなくなる。

姫に無用な宝石を買い与えるのが、すなわち散財と言わずになんだというのか。

「ですから、私は宝石なんていらないんです。東極家の大事な財産を減らしたくありません。私は一希様のそばにいられるだけで充分に幸せですから」

必死に言い募る姫の唇が、一希の耳朶じだにぶつかる。

くつと息を詰めた彼は、姫の肩に腕を回した。

押さえるようにされたので、彼の耳元から顔を離す。

「あっ、すみません。ぶつかりましたね」

「いや……姫の気持ちは伝わった。おまえの健気さは金には換えられない貴重なものもあると理解してくれた。

世の中には金では買えない貴重なものもあると理解してくれた。

ほつとした姫は胸を撫で下ろす。  
一希はわかってくれたのだ。  
世の中には金では買えない貴重なものもあると理解してくれた。  
これで宝石の購入は回避できる。

と思いきや、揚々と姫の肩を抱いた一希は広間に向き直る。  
「すべての宝飾品を購入しよう。姫の美しい心には金も宝石も敵かなわないが、せめて数があれば飾ることができるだろう」

啞然とした姫は言葉を失う。

まつたく伝わっていませんけど……どうしてなんでしよう……

一希との価値観の相違がつらい。

生まれながらの貴公子がいつたいなにを考えているのかわからない。

極上の笑みを浮かべた商人たちはいつせいに礼を述べる。

「お買い上げいただきましてありがとうございます、東極様」

まずい。彼らはさつそくサインを求めるべく、帳面を取り出してきた。

一希の宣言により、すべて購入するのだと思われてしまつたのだ。

確かに一希はそう言つたのだが、少し待つてほしい。

「あわわ……待つてください！ 全部はちょっと……私にも好きなものを選ばせてください」

この場はそう言うしかない。

一希がサインするのを阻止するべく、姫は必死に彼の強靭な胸に腕を巻きつける。

なぜか一希は、ぴたりと歩を止めた。

彼は若干だが頬を染めながら、縋りついている姫を見下ろす。

「それもそうだな。品物を見てからにするか」

まだ品物を見てもいいのに全部買うと言い出す一希に戦慄を覚える。

彼の無垢さが恐ろしい。

けれどここを乗り越えないと、一希の妻にはなれない。

公爵夫人になる前に、なによりも儉約という概念を旦那様に叩き込まなければならなかもしれないと、姫は納得する。

ひとまず姫は一希の胸から腕を離した。

彼に肩を抱かれたまま、ずらりと台座に並べられた宝飾品を眺める。

なぜか肩を抱いている一希の手に、買えという圧を感じるのは気のせいだと思いたい。いずれの品も照明の明かりを受けて、キラキラと眩い煌めきを放っている。

まるで星の瞬きを凝縮したかのよう。

金剛石と思われる細やかな宝石をたくさんあしらったネックレスに、真紅やブルーなど大粒の宝石を冠した指輪、それに黄金で造られている腕輪など、さまざまな宝飾品が上質な天鵝絨のクッションに鎮座していた。

しかもそれらが部屋いっぱいに並んでいるのだ。まるで博覧会のようである。

「ひええ……自分が潰れそうです」

あまりの輝きに、姫はまともに直視できない。

こんなにたくさんの宝石は初めて見た。

これらの宝石たちが地中から掘り出された奇跡と呼ばれるのはわかる。人を魅了する力に満ちている光り方は、魔性を思わせるからだ。

そしてどれも漏れなく、とてもない価格なのだろう。

いくつもの金剛石の指輪が並んでいるエリアで、一希は足を止める。ちらりと姫も目を向けてみると、白銀の眩い輝きが辺りを明るくしていた。

脇に控えている宝石商が、丁寧に商品の説明をする。

「こちらのダイヤモンドは婚約指輪にぴたりです。ラウンドブリリアントカットの最上級品でございます。エメラルドカットなど長めのファセットなども人気がありまして、インクルージョンやクラリティーが際立つという特徴がございます。もちろん品質保証の鑑定書はすべての品についておりますので、ご安心ください」

なにを言っているのか、姫にはほとんど理解できない……

とりあえずこれらの宝石がすべて本物だとだけはわかつた。

冷静な眼差しで、じっくりとダイヤモンドの指輪を眺めていた一希はひとこと放つ。

「ふむ。粒が小さいな」

唚然とした姫は、彼の顔を見やる。

宝石の粒が小さいところが気になるらしい。

小さいと言ふが、どのダイヤモンドも指の爪くらいの大きさである。

これが小さいのなら、大きいのはいつたいどの程度なのか。

まさか隕石くらいだろうか。

すかさず姫たちを取り巻いている宝石商のひとりが、にこやかに言つた。

「こちらはいかがでしようか。最高峰のビジョンブラッドカラールビーでございます。

十三カラットの稀少なルビーがこの皇国に輸入されるのは珍しく、ご紹介できるのは非

常に幸運でございます」

「ふむ……」

まるで血を凝縮したかのごとく鮮やかなルビーの輝きに、姫は息を呑む。

小石ほどもあるので、かなりの大きさだろう。

これほど赤く色づく宝石が異国の中にはたくさん埋まっているのかと思うと驚きを隠せない。

綺麗というより、もはや恐ろしいまでの美しさだ。

だが一希は惹かれないと、反応は薄い。

すると、ほかの商人がまた別の宝石を紹介した。

「こちらのお品はなかなか巡り合えない一品です。ロイヤルブルーカラーラウンドサファイヤでございます。ロイヤルブルーと称されるサファイヤは色合いが深い反面、光が弱いと黒く見えるという特徴があるのですが、こちらの品はそういったことがなく、暗くとも魅力的な色合いとなつております。リングのブリリアントカットダイヤモンドはカラーレスで透明度が高いものがセレクトされております」